

「お父さん、お父さーん！ どこにいるの、お父さーん！」

少女の声は空しくこだまし、険しいディアスポラの山々に呑み込まれていった。陽は暮れかけている。

夜の山は昼間と別物である。父の言葉を思い出し、大好きな母のためとはいえ、帰るに帰れなくて彼女は半べそをかき始めていた。

「こんなところで何をしている？」

その時、山の向こうに見えなくなっただと思っていた太陽が、自分のことを気の毒がつてまた顔を出した、ように思えて彼女は大層、驚いた。

もちろんそれは太陽などではなくて、沈みかけた太陽を背負ったために赤銅色の髪が日輪のように輝いて見えた女性の剣士だった。

「お父さんをさがしているの。お母さんが病気になるっちゃって、お父さん、きんのはちのすをさがしに行つたのに帰ってこないの。でもお母さんがとつても

苦しそうで、だから、あたしがお父さんと、きんのはちのすを探しに来たのに見つからないの」

その女性は近づいてきて、彼女の肩に手を置きながら言った。

「そんなに簡単に自分のことを話すものじゃない。

近づく者があなたの味方とは限らない。見知らぬ者に弱みを見せたり、つけいる隙を与えては駄目だ」

さらに続けてとんがり帽子をかぶった女性と髪を三つ編みにした女性とが現れる。

「初対面の女の子にいきなり人生訓説くなんてあなたぐらいのものでしょうね。

でもねえ、お嬢ちゃん。ここはもうじき戦場になるのよ。あなたみたいに可愛い子がいるところじゃないわ。そうでしょ？」

「そうですけど、黄金きんの蜂の巣ならば昨日お預かりしました。お預かり物ですけれど、滅多に見つからない物ともお聞きしましたし、それを分けてあげるわけにはいかないでしょうか？」

「お姉ちゃん、本当？」

三つ編みの女性が頷いたが、彼女は抱きかかえられ、南瓜の頭をした人形ひとがたが四体現れるのを呆然と見ていた。と同時に、双頭の魔獣ヘルハウンドが向こうから現れ、

さらにドラゴンまで出てくるにいたっては驚きのあまり泣くことも忘れた。

「アイーシャ、彼女を傷つけるな！」

「はい！」

「いくわよく、ドラッグイーター！」

とんがり帽子の女性のかけ声で、四体の南瓜人間たちは自分の南瓜をそれぞれ蹴り上げた。

アイーシャと呼ばれた三つ編みの女性にかばわれてよく見えなかったが、南瓜はだんだん大きくなりながら落ちてきて、一個はドラゴンにぶつかり、三個は見当違いの方に落ちた。それなのに南瓜はどれも南瓜人間の頭に元のように収まっているのだった。

最初の女性剣士がヘルハウンドを攻撃し、獐猛な魔獣は悲鳴すらあげた。さらに彼女は二頭の魔獣を操っていた男も攻撃し、こちらはすぐに両手が上がる。彼は手にしていた鞭を取り上げられるとさっさと逃げ出した。

「ちよつとごめんなさい」

アイーシャは彼女を放し、ヘルハウンドとドラゴンに近づいた。

「当たると大きいけど、まだまだ命中精度が悪いわねえ、グランディーナ、後でラロシエルに行つてもい

いかしら？」

「何の用でだ？」

グランディーナと呼ばれた剣士はヘルハウンドとドラゴンから目を離さない。とんがり帽子の女性は彼女の方に行つた。

南瓜人間は手持ちぶさたに突っ立っている。

「アイーシャ、離れろ！」

手負いのドラゴンがいきなり炎を吐いたが、次の瞬間には動かなくなっていた。

炎を浴びせられたのはグランディーナでアイーシャが駆け寄る。

その時まで忘れられていた彼女を、とんがり帽子の女性が振り返って言った。

「ねえ。この子をいつまでもこんな危ないところに置いておけないわよ。いい加減うちに帰してあげなくちゃ。黄金の蜂の巣も分けてあげればいいじゃない。あなた、どこから来たの？」

「ソミユールよ」

「お名前は何て言うのかしら？」

「ポーシャよ。お父さんはラミスⅡユニカーマンつ

ていうの」

「ラミスⅡユニカーマン？」

「ええ、そうよ。お姉ちゃん、知ってるの？」

けれど、ポーシャの言葉に三人は顔を見合わせた。

グランディーナが近づき、片膝をついてポーシャの手を取る。

少女らしい敏感さでポーシャは不吉な予感を察した。だが彼女はグランディーナの手を拒むこともその言葉に耳を塞ぐこともできなかった。

「あなたの父親がソミュールのラミスⅡユニカーマンドというのなら、この黄金の蜂の巣はあなたの物だ。私たちはあなたの父親からこれを預かった。あなたの父親は蜂の巣を採るために死んでしまったのだ」

「お父さん、もう帰ってこないの？」

グランディーナは頷いた。優しく髪をなでられて、

ポーシャの目から涙がこぼれ、あふれ出した。

「うえええん！ お父さん！」

「あなたの母親があなたの帰りを待ちわびているだろう。ソミュールまで送っていいこう」

抱き上げられてもポーシャはまだ泣きわめいていた。

それから山道を一時間も下っただろうか。辺りがすっかり夕闇に包まれたころ、彼女らはソミュールに着いた。

炎竜の月三日のことである。

ホーライ王国の時代よりディアスポラは交易路として栄えた。深い森とこの地方の中央を貫く山脈が人の開拓の手を拒み、それ以外の方向を選ばせなかったとも言える。特に八〇年前に五英雄の一人、グランによつて東にゼノビア王国が建国されるとディアスポラの重要性は増し、ますます栄えた。

交易路というのがディアスポラの表の顔ならば、裏の顔は大監獄であろうか。

それはホーライ王国より古い時代に建てられたもので、ゼテギネア大陸中の重罪人を集めていた。一説によれば、そこに収納されるのは重罪人とは言っても処刑され得ないような故ある人びとばかりで、そのために監獄は大きく、立派な建物に増築されたのだとも言われる。一種の流刑、幽閉というわけである。

しかし時が下り、神聖ゼテギネア帝国の代になると大監獄の用途も様変わりした。

そこは女帝エンドラや賢者ラシュディなど、帝国やその為政者を批判した人びとが送り込まれる政治犯のための監獄となったのだ。旧四王国に仕えた名のある騎士や魔術師が片っ端から処刑される一方で、大した力を持たない、ふつうの人びとが些細な理由で次々と

大監獄に送られ、ディアスポラでは一度として処刑など行われたことがないのに死者の群れは後を絶たぬとも言おう。

ディアスポラ大監獄は恐怖の代名詞と化した。そこに送られることは緩慢な死を意味していたからだ。

人びとは自ずと口を塞ぐようになり、それでも大監獄に送られる者は止むことがなかった。

白竜の月二五日、ディアスポラの港町ルテキアに到着した解放軍は、そこで旧ホーライ王国の残党九人とヘルハウンド一頭を仲間に加えると、ディアスポラ大監獄の解放を掲げて帝国との戦闘を開始した。

これを迎え撃つべく、監獄長であり、帝国教会元法皇でもあったノルンⅡデアマート率いる帝国軍が敷いた布陣はディアスポラ中の町と街道に駐留軍と検問を置くというものだった。その数は魔獣やドラゴンも含めて各町に二〇から三〇、検問も十ほどで、かつてない大軍がこのディアスポラにいたのである。

しかし、影の報告より、それと知ったグランディーナは街道を使わず、広大な森を経路に帝国軍を各個撃破する戦法に出た。魔獣も含めて十人ほどの小隊に分けられた解放軍は駐留軍、検問を問わずに絶え間ない

攻撃を繰り返した。打撃を与えるとすぐに森に逃げ、帝国軍を休ませず、こちらは部隊を入れ替わり立ち替わりして攻撃したのだ。

数で勝る帝国軍は小回りがきかなくて、この戦法に対応できず、常に解放軍の後手に回った。ディアスポラの森と山は帝国の支配する町と街道よりも遙かに広い。地理に明るい旧ホーライ王国の残党を加えたことは解放軍のこの地の移動を助け、端からそのような事態を想定していなかった帝国はその動きを追いきれなかったのである。戦い慣れた騎士ならばいざ知らず、元法皇には無理な相談というものであつたらう。

解放軍は同日にポアチエ、炎竜の月一日にメーマック、二日に山間の町アジャン、そして三日にはディアスポラの要所ソミュールを陥落させたのだった。

グランディーナたちがソミュールの町に近づいていくと解放軍はすでに野営地を敷設し終わり、ランスロットが八人を出迎えた。辺りには夕餉の支度をする煙も漂っている。

「意外と早かったな。その子はどうしたんだ？」

「山中で見つけた。ソミュールのラミスⅡユンカーマンの娘だ」

「ウンカーマン氏の娘ならば母親から捜索願いが出されていただ。明日にも捜索隊が出るという話だった。早く連れて行ってあげた方がいいんじゃないか」

そう言ってから彼はアイーシャがきつい目で睨んでいることに気づいて慌てて言い直した。

「いや、やっぱり彼女はわたしが連れていこう。君はその傷を治療してもらった方がいい」

ランスロットはそう言う和有無を言わずポーシヤを抱き寄せた。あっさり渡されたのが意外なくらいだ。

「これも忘れるな。彼女の物だ」

グランディーナから黄金の蜂の巣を受け取ると彼は急ぎ足でソミュールに入ってしまった。

それさえ確認する間もなく、アイーシャが早速グランディーナの傷の手当てを始める。ドラゴンのブレスを受けた時、とつさに顔は庇ったものの、腕に直撃を食らってしまったのである。しかもその後すぐに移動を始めたために治療ができず、アイーシャはずつと気をもんでいたのだ。

「アイーシャも大げさだ。これぐらいの火傷などすぐに治る」

「そうじゃないの。だって私、今日はろくに働いていないんだもの。母さまにもいつも言われてたのよ。」

尊いのは汗を流す行為そのものですよって。だから私、ちゃんと働かなくちゃ」

「あなたの負けよ。素直にアイーシャの言うこと聞きなさい。それに私が見たつて重傷よ、ちゃんと治してもらわなくちゃ」

デネブが嬉しそうに言ったが、グランディーナはそれほど不本意ではないような顔だ。

だが彼女らが落ち着いて治療をする間もなく、ランスロットが急いで戻ってきた。

「グランディーナ、君に会いたがつている人がいる。一緒にソミュールまで来てくれないか」

「ランスロットさま、せめて治療が終わるまで待っていただけませんか？ いま始めたばかりなんです」

「それはすまない。こちらの用事はもちろんそれが終わってからでも大丈夫だ」

「私に会いたがつているというの誰だ？」

ランスロットは一度、周囲を見回した。野営地はまだごたごたしていて彼女らに注意を払っている者はいない。皆が皆、適当に忙しそうだ。

「旧ホーライ王国の家臣、ヨハンⅡチャルマーズ殿と仲間の方々だ。つまり、デューンたちの仲間だな」

それで彼が周囲に注意したわけをグランディーナも

理解した。ルテキアとポアチエで合流した旧ホーライ王国の残党は、解放軍への合流に慎重論を唱えるヨハシたちと仲間割れをしてきたのである。

「何と言ってきた？」

「ラミスⅡユニカーマンも彼らの仲間だったそうだし、そのお嬢さんを助けてくれたこと、ラミスの遺志を果たしてくれたことへの礼が言いたいと言っていたが、当然それだけでは済まないだろうな」

「そうだろう。ウォーレンとデューンを呼んできてくれ。あなたと四人で行こう」

「承知した」

ランスロットと入れ違いにデネブが三人分の夕食を運んできたが、さすがのグランディーナも手を出すわけにはいかなかった。

「お夕飯ぐらい食べてから行けばいいのに」

「せっかく持つてきてもらったのに悪かった」

「いいわよ、そんなこと。お取り置きしとく？」

「いや、適当に食べてくる」

「ランスロット、聞いてたわね？ 忘れずに食べてきてちょうだいね。リーダーがお夕飯食べられないなんてことないようにしてよね」

「わたしもまだだ。約束するよ」

「よろしくね」

四人がソミュールに向かってから、デネブとアイーシャも夕食にありついた。途中からグランディーナを探しに来たマチルダⅡエクスラインも一緒だ。

最初は何やら案じ顔の彼女も、デネブに料理の腕を褒められ、思わぬ料理談義に花が咲くと一時は明るい顔になった。アイーシャはもっぱら聞き役で二人の話に相づちを打つただけだ。しかしマチルダは話が済むと元の案じ顔に戻って、ため息さえついていた。

「美人のため息って絵になるんだけれど、マチルダさんは何か心配事かしら？」

「グランディーナに怪我人の報告が上がったんですけれど、どう切り出したものかと思つて」

「そんなに大変だったんですか？」

今日一日、グランディーナとデネブ、四体のパンプキンヘッドと一緒にだったアイーシャは治療部隊の仕事を手伝っていない。その辺の事情はマチルダも承知しているはずだが、後ろめたさからアイーシャはつい小声になった。

「今日は山越えだったから特に多かつたのよ。昨日は森から山、今日は一日中、山、さすがにみんな疲労がたまつていて一晩休んでも抜けきれないの」

そう言つてマチルダはまたため息をついた。もちろん「みんな」には彼女ら治療部隊も含まれるのはい言までもないだろう。

「元気なのはギルバルドさまの魔獣部隊くらいで、魔獣に騎乗すると言つても数に限りがあるでしょう？」

ソミユールで一日くらい休憩できないかしら？」

デネブとアイーシャは思わず顔を見合わせた。そう言われてみれば、先ほどはランスロットもデューンも包帯を巻いていたし、ウォーレンも顔色は良くなかったことを二人とも改めて思い出したのである。

もつとも、どんな時でもデネブは疲労など顔に出したことはないし、アイーシャもアヴァロン島育ちで山には多少慣れている。パンプキンヘッドは身体こそ瘦せぎすがどんな悪路でもその独特の歩き方でついてくるし、ましてやグランディーナときたら絶対に「疲れた」なんて口にしらない超人的な体力の持ち主である。マチルダの話など予想もしていなかったのだ。

「でもグランディーナはソミユールに行つちやつたわよ。何でも旧ホーライ王国の人が会いたがつてつてランスロットが言つてたわ。ランスロットとウォーレンも一緒だったわ」

「戻つてきてから相談してみます」

「マチルダさま、私、仕事を手伝います。薬湯でも何でも言いつけてください」

「ありがとう、アイーシャ。でも薬湯も三日連続となると効能も薄れてしまうのよね。溜まった疲れが取れないようでは薬湯にできることはもうないのよ」

「じゃあ、あたしも手伝つてあげるわ。それにしても黄金の蜂の巣を丸ごとあげちゃつたのはもつたいなかったかしら？」

「でも、あれはポーシャさんのものですから」

「何ですか、黄金の蜂の巣というのは？」

「そのことならば行きながら話してあげるわ。さあ、行つて、どんな薬草があるのか見せてちょうだい。それから考えても遅くないでしょうからね」

「はあ」

マチルダは頷いたが、何の話か全然、理解していないようだ。それでもデネブとアイーシャが立つと一緒についてきた。しかしよく見ると目の下にくままでできている様子は彼女の言い分が決して大げさなものではないことを物語っていた。

「その怪我はどうした？ あなたが怪我を負うなど珍しいな」

「ああ、これか。少し油断していてね、プラチナドラゴンのブレスを喰らったんだ。ドラゴンの生命力を甘く見るなとライアンに怒られたよ」

「あなたの怪我は何が原因だ？」

「わたしも倒し損ねたヘルハウンドにやられました。手負いの魔獣は手強いですね」

「ウオーレン、ずいぶんと怪我人が多そうだな？」

「はい、後でマチルダが報告に上がると思いますが、なぜそのように思われたのですか？」

「ランスロットとデューンのほかに私が気づいただけでカシム、オーサ、アレック、ロベール、それにガイ・ダイナーが怪我をしていた。それにあなたの顔色も悪い。多いと判断するには十分な人数だと思うが？」

「そのとおりです。試すようなことを言っただけありません」

「あなたが謝る筋合いでもあるまい。連日の山越えで疲れたか？ それならば明日のディアスポラは攻め方を変えなければなるまいな」

「ソミュールで一日、休憩を取るわけにはまいりませんか？ アンジェの話ではディアスポラまでもう一度、山越えをしなければならぬということですが」

「攻める勢いが切れるのはしたくない。後でマチル

ダの報告を聞いてからにしよう」

「こつちだ」

ランスロットが先に立ち、彼女らは一軒の商家らしい建物に入っただけだった。

中で出迎えたのは予想どおりヨハン・シャルマーズを代表とする旧ホーライ王国の面々で、デューン・サーマーハが同行していることには驚いたようだった。

当のデューンは軽く頭を下げたものの、自分はずくに解放軍の一員なのだという聞き直りとふてぶてしさを見せている。

「私にわざわざ来いと言うのは何か別の用があつたことではないのか？」

故ユンカーマン氏のことと簡単な謝礼の言葉が述べられるとグランディーナは早速、切り出した。

「それは、ご想像いただいているかもしれませんが、わたしたちもゼギネア帝国とともに戦いたいという意志を表明したいと思ひます。我々の規模も力も決してあなたの方に劣るものではないと思ひます。打倒帝国に向けて、力を合わせようではありませんか」

ヨハンも旧ホーライ王国の元文官だと言った。列席したほかの面々もおおよそランスロットと同世代の者で、その彼らより一回りほど年上である。

「その前に訂正していただく。規模はともかく勢力は私たちが上だ。解放軍に加わるというのならばいざ知らず、ともにだの、力を合わせるだのという勘違いした言い方をされるのは不愉快極まる」

ヨハンは返す言葉に詰まったようだが、それ以外の剣士や騎士たちが顔を朱に染めて立ち上がった。

「まるで自分たちだけが戦ってきたような言い方をするな！」

「打倒帝国なりし、あかつきにはその手柄をゼノビアの連中だけで独り占めするつもりか?！」

「解放軍のリーダーは傭兵上がりと聞いたが、礼儀を知らぬことは噂以上だな！」

「ゼノビアの手先め！」

どさくさに紛れてゼノビア王国まで侮辱されたようですが、彼のランスロットも反論する言葉が喉までせり上げたが、彼は微動だにせずこらえた。

こんなところでゼノビアだのホーライだのと言いつつ、うことの方がよほど空しい。それを言ったら大陸にはまだ三つの王国があったのに、帝国も倒さぬうちからこんなことで争ってはられない。だがいざ片づけなければならぬ問題でもあるのだらう。そしてこれはそのためのグランディーナの先制攻撃なのだ。

そういうわけで彼女は涼しい顔でこれらの罵倒を聞き流した。ランスロットも相手が抜刀でもすれば黙っているつもりもなかったが、彼女はそれでも容易に刀を抜かないだらう。ウォーレンを盗み見るとこの老人はもつと冷静に皆、グランディーナやヨハンばかりでない、そこにいる全員を観察しているようだ。

「あいにく私はゼノビアの人間ではないし、ゼノビアに肩入れした覚えもないし、これからもするつもりもない。だがこの戦争を始めたのは私たちだし、ここまで帝国を相手に勝ち抜いてきたのは私たちだし、この滅亡からゼテギネア帝国に対して抵抗らしい抵抗も見せていないことも知っている。あなた方と我々とは対帝国への実績に明らかな差がある。それでも対等だと言いつつ証拠があると言おうのなら伺おうか」

「確かに我々が目立った活動をしていないのは事実、お恥ずかしいことですが反帝国は名乗ってもそれは否定いたしません。しかし、大陸の東の辺境に位置するゼノビア領とほぼ中央に位置するホーライ領とでは帝国の支配の仕方も重視の度合いも異なりましょう。それを同列に論じられては困ります」

文官らしくヨハンは反論したが、口先猛々しかった

騎士たちは黙り込んでいた。

「帝国の戦力差を言うのなら、我々はゼノビアに駐留した四天王が一人デボネアを破り、アヴァロン島では女帝の実弟、黒騎士ガレスをも討った。対してここディアスポラの支配者は監獄長であり元帝国教会の法皇ノルンIIデアマートと聞いているし、その前も監獄長が兼ねてきたはず、ガルビア半島とアンタリア大地は旧ゼノビア領に負けず劣らぬ辺境、あなた方が主力を失った首都のバルハラはラシュデイが使った魔法のために永久凍土と化して都市の機能そのものがまともに働かなくなっていると聞く。大陸の中央に位置しているようにこれがホーライ領の現実だ。それを、中央にあるというだけで四天王と黒騎士とを同列に論じているのはそちらではないのか。ガルビア半島、アンタリア大地、バルハラにこれほどの大物がいるという報告も聞いていないか？」

「ガレス皇子はともかく、デボネア將軍はゼノビアに左遷されたと聞いています。それに解放軍は彼に逃げられたそうではありませんか。破ったなどと大仰に言えることではないではありませんか？」

「デボネアが逃げたのは私たちに負けたからだ。それに四天王であることも事実、左遷されようが正規に

派遣されたのであろうが、実力に不足があるとも思えないが、そうではないのか？」

「ではスラム街と化した王都ゼノビアのことはどうお考えですか？」

グランディーナには珍しく小さなため息をついてみせたが、これはウォーレンやランスロットにも聞かせる意図があつてだろう。

「私が請け負ったのはゼテギネア帝国を倒すまでのことだ。どうして皆が皆、戦争屋に復興まで負わせたがるのか理解に苦しむ。だが幸いなことに旧ゼノビア領の復興は別の手で進んでいる。イグアスの森は当分、人の手は受けつけまいが、ヴォルザーク島、シャローム地方、ジャンセニア湖、それにバルパライソの復興は順調だそうだ。スラム街の住民が故郷に帰る気になれば、自然とゼノビアの再建も始まる。復興が進めば人手も加速度的に増えよう。問題なのは旧ゼノビア領ではない。旧ホーライ領やこれから戦場になる、旧ドヌーブ、旧オファイス、それに旧ハイランドではないのか？」

もちろんウォーレンもランスロットも旧ゼノビア王国領の復興を誰が担っているのか知っている。知っているからこそ戦争に専念できるのだ。

犠牲者の比較的少なかった魔獣軍団が、元団長ギルバルドの命令と、彼の副官的な存在だったスタイン・アレズベックの指揮で動き出し、最初はシャローム地方から始まった動きが各地に広がっているのである。元魔獣軍団員が手なずけた魔獣を連れていったことも幸いしていた。人間には手に余るような瓦礫も、魔獣の力を借りれば短時間で片づく。グランディーナの言うように再建が進むにつれて復興は加速度的に速まり、ヴォルザーク島のように人手は余りだしているところもあるという。

もつとも一連のそのような動きに解放軍のリーダーの意志が働いているかどうか、ギルバルドは語らない。そして彼女自身もまた、自らを戦争屋と称してはばからず、再建に意見を挟もうとはしないのだ。

しかし、ヨハンたちは旧ゼノビア王国領の順調な復興のことまでは知らなかつたらしく、一時はスラム・ゼノビアとまで揶揄された王都の再建がすでに始まっていると聞いて、かなり驚いた様子だった。

残念ながら、解放軍を支える身では旧王国領の復興をこの目で確かめる機会はまだ廻ってこない。そういう報告がギルバルドからグランディーナやウオーレンに上がっているというだけのことだ。それに一族郎党、

所領も失ったランスロットには純粹な好奇心という以上に旧ゼノビア領に帰る理由がなかった。

「話のついでだ、もう一つ訊いておきたい。デューンたちを除いて、あなた方がルテキアで我々に合流しなかった理由は何だ？」

「あなた方の蜂起を知らなかったわけではありませんが、我々の準備が整っていなかったのです。それにあなた方についての情報が少なかつた。むやみに合流するわけにはいきませんでした」

「準備が整うまで戦争ができないとは初めて聞いた。帝国がそれを待っていてくれれば良いがいつからそのようなお人好しの集団に成り下がったのか初耳だな」

「侮辱するにもほどがありません！ いまの言葉、即刻、取り消して謝罪していただきたい」

「断る。私は戦争屋だと言った。戦争を行うのに準備が整わないなどという理由は間違つても口にしない。討つべき敵がいるから戦う。準備など後からでも整えられる。準備など整わなくても戦う。あなたの寝言に付き合っつていられるか」

しかし立ち上がったヨハンは容易に腰を下ろさない。

「だがあなたはもつと言葉を選んでくれてもいいじゃないか。言うに事欠いて寝言だのお人好しだの、

人を馬鹿にするにもほどがあるじゃないか！」

「この期に及んで旧ホーライ王国にしがみつきたいならばそうするがいい。だがあなたが抛るべき国はもうないし、ゼテギネア帝国が倒された後に建国される国もいままでのしがらみから離れた国であるべきだ。あいにくと私はその保証ができる立場にはない」
年上のヨハンの方がまるで子どものようだ。だが彼は地団駄を踏んだりはしなかった。ようやく腰を下ろすと、泣きながら笑い出した。

「そうだ、あなたの言うとおりだ、ホーライ王国はもうないのだ、そんなことは二四年前からわかりきっていたことだ。ホーライだけじゃない、ゼノビアだってドヌーブだってオフアイスだつてとつくに滅亡してんじゃないか。おかしな話もあったものだ。そうだろう？ わたしは何て馬鹿なことをしているんだ。国なんてなくなつてののに」

そうしてしばらくはヨハンの笑い声だけが聞こえていた。デューンが話しかけようとしたがグランディーナに遮られたのである。

やがてヨハンは泣きやんだ。目元をこすり、目をしばたたく。その顔は長い夢から覚めた人のようだ。そう彼は夢を見ていたのかもしれない。ホーライ王国が

存続しているという夢をいつまでも見ていたかったのかもしれない。だがその夢はとうに終わっているのだ。夢の中だけでの出来事ではなかったのだ。そんな夢の目覚めはさぞ苦いことであつたらう。

「わたしは何と愚かだつたのだろう。十五年前とまた同じ過ちを繰り返すところだつた。サラディン殿の教えに従つて行動してきたはずだつたのに、何の意味もないことをしてしまふところだつた。あなたには礼を言わなければなるまい。サラディン殿はわたしの恩人なのだ。あなたはそのことを思い出させてくれた」
その時、なぜグランディーナが拳を握り締めたのか
ランスロットはとうとう訊けずじまいだつた。それはやがて訊く必要がなくなつたからでもあつた。

「改めてお願いする。グランディーナ殿、我々を解放軍に加えてはいただけまいか？ そしてともにゼテギネア帝国と戦わせてほしい」

抗議の声は上がらなかつた。旧ホーライ王国の残党のなかで、ヨハンⅡチャルマーズという人物が占めてきた役割はウォーレンやランスロットのそれに匹敵するものがあるようだ。

「解放軍を代表してあなた方を歓迎する。我々はソミュール郊外で野営している。明日の朝、来てくれ」

「なぜ、野営など？ いまからでも遅くない、宿舎を用意するから泊まられるとよろしかろう」

「解放軍には魔獣も多い。それに町に負担をかけるのも不本意だ。すでに断つた前例もある。宿舎の件はお断りする」

ヨハンが手を差し出し、グランディーナはそれを握り返した。ひとまず会話は終わったのだ。同時にそれは解放軍の勢力が増えたことをも意味していた。

「ウォーレン、ランスロット、後でアッシュとギルバルド、マチルダと話があるからそれまで休め。皆も休ませろ」

「承知した。君はどうするんだ？」

「マチルダの話聞く」

デューンがため息をついたのでランスロットは振り返った。グランディーナにも聞こえたかもしれないが、彼女はさっさとマチルダを探しに行ってしまった。

「解放軍のリーダーというのはあれほど頑強でなければ務まりますまいか？」

「彼女は特別だ。あの強さは我々凡人が真似できないようなものではないよ」

ウォーレンが少しにらんだが、ランスロットには紛

れもない本音だ。いまのグランディーナと同じことをやれと言われても誰にも務まるものではないだろう。

「君も休みたまえ。みんなにも休むよう伝えなければな。」

ウォーレン、あなたはここで待っていてください。

わたしは野営地を一回りしてきます」

「お願いします、ランスロット」

それで途中までデューンと連れ立ってランスロットは言ったとおり皆の様子を見て回った。改めて指示するまでもない。怪我人は多く、「休め」と言われるより早く、ほとんどの者が休んでいた。

アッシュも体力勝負の山越えはかなり堪えたようだったが、グランディーナの言葉を伝えると重い腰を上げてウォーレンのもとに向かった。

だが、ランスロットが最後にマチルダたちのもとに立ち寄ろうと歩を向けると、少し離れたところからも異臭が漂ってきた。

異臭の元は予想どおり、魔女デネブで、毎日煮炊きの大活躍の大鍋を前に何かを煮込んでいるようだ。

もつとも彼女と鍋を見た時に、ランスロットは自分たちの夕食を忘れていたことを思い出した。

「これは、何をやっているんだ？」

「デネブの特製スープだ。二〇種以上の材料を混ぜて煮込むんだが、疲労回復に抜群だと言ってた」

「まさかと思うが、君はそれを皆に飲ませるつもりじゃないだろうな？」

「最初に私が飲んでみて、何もなければ皆も飲めるだろう。何か問題があるか？ ただ材料があまりないので人数分作れるかどうか微妙なところだそうだ」

「わたしは遠慮してもいいだろうか。それよりもまともな食事をしたいんだがな。」

マチルダ、何か余り物でもないかい？」

「申し訳ありません、ランスロットさま。それが今日は最初から分量を間違えてしまったようで、ここに残っていらつしゃった方の分も足りなかつたんです。ギルバルドさまとカノープスにはソミュールで食事していただいたくらいで」

それを聞いた瞬間、ランスロットは大真面目に目眩がした。空腹も過ぎると人間怒りっぽくなると言われるが、いまの彼は倒れてしまいそうな気持ちだ。

「案ずるな。腹が減つたのは私も同じだ」

「そういう慰められ方は逆効果だと思っただがね」

「そうか？」

アヴァロン島での一件以来、グランディーナとデネブ、それにアイーシャは妙に気が合うようでよく一緒にいる。もともと人間離れした強さを持つリーダーと一切の常識が通用しない魔女である。その組み合わせはランスロットにもわからなくはないのだが、この三人のなかではいちばんの常識人であるアイーシャがまたデネブと仲が良いのも理解に苦しむところだ。

今日もアジャンを発つ際、デネブは別路を指定して譲らなかつた。そこでラミスⅡユンカーマンの娘を保護したことは結果論に過ぎない。グランディーナとアイーシャまでデネブに付き合うことはなかつたろう。

「できたわ」

振り返つたデネブの眼差しは光り輝いていた。額に玉のような汗を浮かべ、片手にお玉杓子、片手に小皿を持つているところなど立派な料理人である。いつものとんがり帽子でなくピンク色の手ぬぐいで髪を覆っているのも念が入っていた。

「最初の一口は誰がいただくの？」

「私でもよろしいでしょうか？」

当然グランディーナかと思いきや、果敢にもマチルダが挙手した。彼女の勇気をランスロットは褒め称えてやりたい気持ちだ。カノープスならば、さしずめ無謀だと言うかもしれないが。

「え、マチルダさん？」

「私は大して疲れていない。確かにマチルダの方が効能もわかるだろう」

「お願いします」

もつともデネブにはこれがよほど意外だったらしい。

「ちよつと待ってちよつと待って。材料を一つ入れ忘れちゃったわ」

彼女は振り返って小皿の中身を鍋に戻すと、さらに何かを足して鍋をもう一混ぜした。それが何かの生き物のように見えたことは果敢なマチルダのためにもこの際、言うべきではないだろう。

「さあ、どうぞ」

「いただきます」

とは言ったものの、小皿から立ち上る臭いにマチルダは思わず怯んだ。それがグランディーナとデネブ以外の面々を余計に案じさせる。

しかし彼女はあくまでも果敢であった。鼻をつまみたい気持ちをこらえて中身を一息に飲み干したのだ。

マチルダにはその味を形容することはできない。いや、デネブ以外の誰にもできなからう。ただ、何か得体の知れないものが喉を通りすぎ、目の前に火花が飛んで、喉と胃が燃えるように熱くなった。

腰から崩れた彼女を支えたのはグランディーナだったが、もちろんデネブも含めてその場にいた全員が集まってきていた。

「大丈夫か、マチルダ？」

頭の芯から痺れがまわっていた。だが心地よい痺れだ。それはどこか眠りにも似ていた。夢を見ることのない、深い眠りだ。彼女は答えられず、まぶたは自然にふさがっていた。

「デネブ、あなたが作ったのはもしや睡眠薬じゃないだろうな？」

「そうとも言うわね。でも、ぐっすり眠って翌朝には疲労回復、嘘は言っていないわよ」

「量が足りないと言っていないわかったか？ それにしてはマチルダはずいぶん効くのが速いようだが？」

「それはあたしも驚いているのよ。これには即効性なんてないんだから。でもマチルダさん、最近かなりお疲れでしょ？ それでよく効いちやつたんじゃないかしらねえ。それで、皆さん飲むの？」

「わたしは遠慮する。これから話し合いがあるのに寝てしまうわけにはいかないからな」

「私も飲んでみたいんですけど、いいですか？」
次の挑戦者はモームⅡエセスだ。彼女はマチ

ルダのようにいきなり寝込むことはしなかったが、しつかり不味いと感想を漏らした。それはそのまま後続を断ち切りかねないような意見だったが、マチルダが気持ちよさそうな寝息を立てていたのが功を奏して、最終的には全員にスーヴが行き渡ったのはデネブらしい結末であつたらう。

「いくら疲れているからって夜番も立てずに休む奴があるか」

「カボちゃんたちにさせておくわ。皆さん、それだけお疲れなのよ、大目に見てあげなさい、ね？」

グランディーナはデネブに八つ当たりもしなかったが、見張りの件はそれ以上、言明するのは避けた。

解放軍中が眠りに包まれることとなり、起きているのはグランディーナとデネブ、名指しされたウォーレン、ランスロット、ギルバルド、それにアッシュだけである。見張りにはデネブの指揮で四体のパンプキンヘッドが立ったが、言葉を発しない彼らが万が一の場合にはどのような警告を発するのかは興味深いところだ。

「皆さんの分もスーヴは残ってるわよ。良かったら後でどうぞ」

「本当に効くのか？」

「あたしの腕前を疑うの？　とやりたいところなんだけど、こればかりは皆さん次第だわねえ。どうしても疲れの取りきれない方っているものなのよ。若さと体力、日ごろの鍛え方次第って感じかな」

「そうだろうな」

「明日は予定どおりディアスポラ大監獄を攻めるのですか？」

さつきと休みたいウォーレンが本題に入る。男性陣ももちろん反対するところではない。

「そうだ。だがあなた方も知っているとおり、疲労による怪我人が増えている。このままディアスポラを攻めてもいい結果は出るまい。デネブの特製スーヴがどれだけ効果があるのかわからないが、それを当てにした戦術を立てるわけにもいかない。だから最初から別働隊を組んでディアスポラを攻めようと思う」

「もう！　あたしはあくまでも控えめに言ってるのよ。効くのかどうか、わからないなんて信用しないにほほどがあるわ」

「話がややこしくなりますから、それ以上、余計な口を挟まないでください、デネブ。」

反対する理由はありませんが、あなたのほかに誰が行かれますか？」

「それは明日、決める。どちらにしてもここで休む者が出ることは避けがたい。少し無理をさせたな」

「そうと承知されていて、なぜソミュールに宿を求めなかつたのです？ 確かに容易に助けを求めてならないこともわかりますが、これは緊急事態なのではありませんか？」

「この程度のことでは緊急事態など聞いて呆れる。皆に無理をさせたのは確かに認めるが、これからも同様の戦術は取る。自分たちのひ弱さを棚に上げて帝国と戦うつもりでいるのか？」

「いつまでもゲリラまがいのことをしているわけにはいかないと思います。我々は傭兵ではありません」

「リスゴーが除隊したと思ったら、今度はあなたが言い出すのか。同じことを何度も言わせるな。帝国に数で劣る私たちが勝つにはこうした戦術しかない。それもその差は数倍では済まない。帝国が全軍を繰り出してみる、たとえ大陸中の反帝国勢力が結集したところで帝国にかなうものか。蟻を踏みつぶすより容易に我々は踏みつぶされるだろう」

「その話も何度も伺っています。ですが実際には帝国は全軍など繰り出して来ていません。実際には踏みつぶしなどに来ぬものをあなたはただ恐れているだけ

ではないのですか？」

グランデイーナの表情が皮肉に歪む。だがデネブは当然のこととしても、ギルバルドもアッシュもウォーレンに同調しない。ランスロットも黙っていた。

「その台詞、踏みつぶしに來てからでは遅いということとはわかつて言っているのだろうな。先ほどヨハンⅡシャルマーズと話した時に、準備が整ってからなど戦争は始めないという話をした。だが始めてから何もしないのは愚か者だ。戦争を始めたからには勝つ。だが相手は大陸全土を支配する帝国だ。私は戦争は最後に勝てばいいものと思っているが、そう考えない者の方がよほど多いし、負け戦続きは軍の士気にも影響するからあながち間違いとばかりは言えない。だが勝つと一口に言ってもたやすいことじゃないのはあなたとて承知していよう。ましてや数の少なきによる不利は大國ゼテギネア相手には多少の戦略の工夫や英雄譚などをもつても補いきれるものじゃない。だが正攻法でぶつかつても勝つことはできない。傭兵だの騎士だのにこだわつていれば勝てる戦も逃す。我々の全てが英雄的な活躍をしても、戦力の差は容易に埋め切れまい。まずは日々の戦を勝ち抜くこと、勝ち続けること、それも不利と思われる戦局を引つ繰り返してこそ

勝利には価値がある。勝てば士気は上がり、仲間も自ずと増えるだろう。数の不均衡は容易に引つ繰り返すことはできまいが、勝ち続けるという紛れもない事実が民衆の支持をも得られるだろう。もちろん勝てばいいというものでもないことぐらい私も承知している。だが負け続ける軍隊を支持する者もつとめない。圧政を布いたのは帝国だが、曲がりなりにも平和を乱しているのは私たちの方だ。あなたにその自覚はあるのか？ それでもあなたが私のやり方に賛成できないと言うのなら、私にも考えがある」

グランディーナの反論にウオーレンは驚いたようだったが、疲労の色も濃いアッシュが取りなすように口を挟んだ。

「そのような話は議論の尽きることがあるまいが、日を改めてはどうだ？ 今日の行軍で皆が疲れておる。いま話すべきことではないと思うがいかがか？」

「そうね。あたしもアッシュに賛成するわ。疲れると判断も鈍っちゃうもの、二人ともあたしの特製スープを飲んでお休みなさいよ。一晩休めば考えも変わるわよ。夜つていうのは特に人を暗い考えに固執させちゃうものね。本当はこういう深刻な話し合いを夜中にやっちゃいけないのよ、知ってた？」

「私が始めたわけじゃない」

「可愛くないと言わないの！ 行きましょ」

デネブがグランディーナを強引に連れて行ってくれたのはありがたかった。しかしランスロットが立ち上がるより速く、アッシュがウオーレンに話しかけたので彼はまだ立ち去るわけにはいなくなってしまうた。

「残念だがそなたの意見に、わしは賛成しかねる。戦のことはグランディーナの方が玄人、そなたの考え方は素人、騎士道を理解せぬ者が理想論を唱えているだけにすぎん。それにあれはゲリラとか傭兵などというわかりやすい戦術でさえない。ゲリラ戦というのはもつと犠牲者が出るような戦のこと、だがグランディーナの取る策は逆にほとんど兵士が死んでおらんではないか。このような戦術を何と呼んだら良いのか、わしにはわからんが、知られている如何なる戦術も当てはまらぬ特別なやり方の方のようだ。ここまで解放軍をまとめてきたそなたの手腕を疑うものではないが、これ以上戦のことに口出しするのはやめにしたらどうなのだ？ 確かに傭兵らしい強引さはあるが彼女の言うとおり、負け戦を続ける軍は如何な高い理想を掲げていても、いずれ人心は離れていこう。民衆の心とはそれほど危ういものよ」

元騎士団長にまで怒られて、さすがのウォーレンも
気落ちした様子だった。

「ではアッシュ殿にお伺いしますが、騎士道とは如何なるものと仰せられますか？」

アッシュはその場にいる者の顔を一人ひとり眺め、
穏やかな笑顔を浮かべた。

「騎士道とは己が主君のために死ぬるほどの覚悟のことだ。剣を捧げた者に命までも捧げること、それがわしの考えている騎士道だ。だがわしは陛下のために死に損ない、騎士道を貫くことができなんだ。生き恥をさらすとはわしのためにあるような言葉よ」

「ですが、まだトリスタン皇子がいらつしやいます。アッシュ殿はなぜ皇子のために騎士道を貫くと仰つてはいただけずまいか？」

ランスロットは思わず口を挟んだ。

「わしはまだ皇子に剣を捧げてはおらぬ。剣を捧げる相手もおらぬのに騎士道を貫くとは言えまい。だが一度、剣を捧げたならば迷いがあつてはならぬ。忠誠を貫くが騎士道、たとえそれが正義でなくてもだ。

さて、わしらも休むとしよう。この状況ではディアスポラ監獄の解放にはギルバルド、そなたらの力が必要にならうからな」

「幸い、魔獣部隊はそれほどの打撃を受けていません。飛行魔獣も温存していますから、いつでも行けましょう」

一人、蚊帳の外に置かれた格好のウォーレンはグランディーナの言い分にもアッシュの話にも、どこか納得しきれない様子だった。だがランスロットは話しかけなかった。そもそも〈啓示の彗星〉の導きで皆の反対を押し切るようにしてグランディーナを解放軍のリーダーに据えたのはウォーレンだ。彼が納得してしようといなかりうと、これからも彼女を中心に戦いは進んでいくだろう。

「ウォーレン、わたしも休みます」

彼は無言で頷き、ランスロットもそれ以上声をかけることは躊躇ためらわれた。

あの様子では一晩中、悶々と考え込んでいるかもしれない。だがそもそも言い出したのはウォーレンだ。その決着は彼以外にはつけられないのだろう。

「結局、夕飯を食いつぶされたな。わたしも特製スープでも飲んで休むとしよう」

その夜の解放軍の野営地はいつにない静寂に包まれていた。動く影は五つ、だがそれらも次第に動きを止

め、最後まで動いていたのはただ一人であった。

「おはよう、グランディーナ。いや、振り返らなくていい！」

もつとも彼女が水浴びをしているところなどに出くわしたなら、たとえアッシュだつて同じことを言ったに違いないのだ。とはいふものの、ランスロットは自分が尊敬する元騎士団長を引き合いに出したことを多少後ろめたく感じた。

「ずいぶん早いな。デネブの特製スープはあまり効かなかつたのか？」

「その逆だ。効きすぎたのと夕食を食べ損ねたので夜明け早々に目が覚めてしまった」

「そう言えば、あなたには気の毒なことをしたな。私は一食ぐらい抜いても気にしないが、あなたまでつき合わせたのは悪かつた」

背後で水に入る音が聞こえた。

不本意ながら彼がグランディーナの裸身を拝むのはこれが二度目だ。それがかれこれ一ヶ月も前のことであるのに気づいて、ランスロットは改めて時の過ぎた速さを思う。あれから彼らの周囲は大きく変化した。しかしゼノビア城の解放はよほど大きな行事になるか

と思っていたが、彼のなかではすでに過去の一部となりつつあるのは意外なところだ。

「わたしとてそれぐらいで弱音は吐かないさ」

「それで朝から何の用だ？ あなたも水浴びをするのか？」

「いいや、しない。わたしは目が冴えて朝の散歩をしていただけだ。そうしたら水の音がしたんで様子を見に来た。君の邪魔をするつもりはなかつた」

「そうか。私はほとんど寝なかつた。川方面の見張りが疎かだつたからついでに歩哨もしていたが、パンキンヘッドも寝るものらしい。結局、全部一人で見回る羽目になつた」

「どうして声をかけなかつたんだ？ 気がついていれば、わたしも交代できたのに」

「それであなたに倒れられては私が困る。ついでだと言つた」

グランディーナが水から上がる音がしてランスロットの脇を通りすぎる。彼女のことだ、間違つても無警戒とか無防備という言葉は思いつかないが、無関心にもほどがある。

「君にはお節介な話かもしれないが、わたしも一応、男だ。もう少し気を遣ってもらえるとありがたい」

その時、彼女が振り返ったのが意外だった。自分の言葉の何がそんなに驚かせたのか、ランスロットの方が驚いたぐらいだ。

「あなたはジャンセンア湖でも気にしていたな。私も自分の身体が褒められたものじゃないという事はつい忘れるんだ」

「そうじゃない、グランディーナ。君は十分、魅力的な女性だ、だから気をつけろと言いたいんだ」

「あなたは本気でそんなことを言っているのか？」

「冗談で言うことではないと思うがね」

彼女はしばし無言で、服を着る手も止まった。狼狽えこそしなかったが、そういう台詞を言われ慣れていないのは間違いない。

「あなたは変わった人だな。お世辞でもそんなことを言われたのは初めてだ。いや、一人だけそういう変わり者がいたついな」

「わたしはお世辞を言えるたちではないし、君の言う変わり者氏もお世辞は言っていないだろう。そんなことはとつくに知っていると思っていたがね」

やっと彼女の手が動き出す。もつとも動き出したら手早いのはらしいところだ。

「私がありがとう、と言うべきか？」

「わたしは礼を言われるようなことは言っていない。君は逆に見る目のない連中を怒ってもいいぐらいだと思っぬ」

言ってからランスロットは軽く片目をつぶってみせた。グランディーナは笑顔こそ浮かべなかったが、少しだけ和やかな表情になっていた。

野営地に戻るとすでにほとんどの者が起きていてマチルダたちが朝食の支度で忙しそうに立ち働いていた。ミネアとエオリアがいないのはデネブの特製スープがそれほど効かなかったからだろう。そう思わずにいられないほど、働いている皆の顔色は良く、元気そうだ。

「おまえら、ずいぶん早起きだなあ」

カノープスがグランディーナとランスロットを見つけて声をかける。言いながら大きなあくびをして両腕を伸ばした。

「また水浴びに行つてたのか？ おまえも意外ときれい好きなんだな」

「水浴びに行つたのは事実だが意外とは余計だ」

「そいつは悪かった。まさかと思うけど、二人で仲良く水浴びしてたんじゃないだろうな？」

「するはずないだろう」

「それにしてもデネブのスープは大したものじゃないか。身体中きしんでいたのが嘘のように軽くなったぜ。昨日の朝よりも具合がいくらいだ。ディアスポラ攻めもどんとこいだ」

「私もそれほど期待していなかったが、かなり効いたようだな」

「あーら、それほどなんてつれないこと言ってくれんじゃないの。そんな冷たいこと言うのなら、もう御馳走なんてしてあげないから」

デネブはそれほど素早いわけではないのだが、ランスロットもカノープスも不思議に思うのは、彼女がいつも容易にグランディーナの背後を取ることである。

あるいは取らせていると言うべきか。

「そう言うな、デネブ。不確定要素を計算に入れるわけにはいかない。当然のことだ」

「そんなことわかってるわよ。リーダーとしては当然の判断よね。でもそんなつれないこと簡単に口にしてないでちょうだい、淋しくなるじゃないの」

デネブののりは理解不能だ。しかしアヴァロン島の一件もあるし、ランスロットとカノープスの共通した意見は「魔女のすることに口出しするべきではない。曰く、触らぬ神に祟りなし」である。もつともそんな

話をしていたら、ギルバルドには苦笑され、ユーリアにも笑われた。

「朝食が済んだらディアスポラ攻めの話をしよう。そろそろ旧ホーライ王国の連中も来るころだ」

「それであなたはどこ行くのよ？」

「ウォーレンと話したいことがある」

「その前に朝食と一緒に食べましょ！ あなた、昨日の昼から何も食べていないでしょ？」

「寝る前にあなたの造ったスープを飲んだ。朝食なんて後でもいい。先にウォーレンと話す」

「冗談言わないの！」

ランスロット、あなた、昨日はあんなに頼んだのにリーダーに夕飯を食べさせ忘れたわね?!

「あ、ああ、すまない」

「んもう！ 当てにならないんだから！」

「それぐらいのことで大騒ぎするな。携帯食ぐらいウォーレンが持つてる。」

ランスロットもいちいち謝るな」

「グランディーナ、待ちなさいよ！」

「ついてくるな！」

「んもう、へそ曲げたおじいちゃんなんて放っておけばいいのに！」

去っていくグランディーナにデネブは舌を出したが、ランスロットが止めるまでもなく、追いかける気はないようだ。だが、小言を言う前に彼女も去ってしまい、後には興味津々といった顔のカノープスと彼だけが残された。

「昨日の晩、じじいと何かやらしたのか？」

いまの会話を聞いていたのがカノープスだけだというのは不幸中の幸いだろうか。それとも昨日のような話をデネブに知られたと嘆くべきだろうか。

「グランディーナとウォーレンが揉めたんだ。珍しくアッシュ殿が彼女の肩を持ったから、ウォーレンにはおもしろくない話だったろう」

「そいつは深刻そうな話のようだな。だけど何となく揉めた理由は想像がつかないでもない。だが俺はグランディーナにつくぜ。悪いがウォーレンじゃ、勝てる戦も落としかねえからな」

「本気でそう思っているのか？」

「思ってるから、おまえらだつてあいつを担ぎ上げたんじゃないのか？ ウォーレンだつて馬鹿じゃない。みすみす勝てる戦を棄てたりはしなからうさ。曲げられるところはいくらだつて曲げるだろう」

「ならばなぜ、わざわざそのようなことを言ったの

だろうな？ 万事、彼女に任せていれば済むことじゃないか？」

「それは俺にもわからない。ウォーレンてのは昔から、何考えてるんだかわからないところがあつたからな。だけどグランディーナも馬鹿じゃない。簡単にウォーレンを切つたりはしないだろうさ。いなくなつたら困るのはお互い様だ。あの二人はあれで、案外いいコンビだと思うぜ」

「君がそう言うのなら大丈夫だろう」

「何だ、珍しいな、おまえさんがそういう言い方をするのは。どういう風の吹き回しだい？」

「自分にできることをする、それだけのことさ」

「いい傾向だ。さあ、俺たちも朝飯を食おう。さすがに今朝は人数あるだろうからな」

「そのことでマチルダたちを責めたわけではないのだろうな？」

「当たり前だ。俺とギルバルドは逆にいい思いをさせてもらったさ。のんびりできなかったのが心残りだつたがな」

「君たちらしい」

「何言ってるんだ。今度はおまえやグランディーナも連れてくぞ。この期に及んで酒が飲めないなんて冗

談は聞く耳持たねえからな」

「あなたにはデネブの特製スーブは効かなかったようだな」

「わたしほどの歳になると山は堪えます。もともとそれほど鍛えてもいけませんので体力に自信はありませんから」

「ヴォルザーク島に戻るのか？」

「まさか！ それともあなたが戻れと命じられるのですか？」

「それこそまさかだ。たとえあなたが帰りたいと言っても帰す気はない。解放軍にはあなたが必要だ。あなたが求めている、軍師としての役割ではないとしてもな。それだけ言いに来た」

ウオーレンはしばし沈黙した。確かに彼女は軍師など必要としていない。解放軍ではリーダー自身が軍師であり、最強の剣でもある。アッシュが口を挟まぬ理由もそれで納得がいく。元騎士団長は旧ゼノビア王国最強の剣ではあったが軍師であったことはない。それはかつて「グラン王の知恵袋」とも呼ばれた元魔法軍団長グラント・オフトマインの役目であり、グラント引退後も魔法軍団長が務めたものなのだ。

「デネブの特製スーブは皆が効いたのですか？」

「全員とはいかないが半数以上の者が癒されたのは間違いないようだ。だがデネブに言わせると材料がもうないらしい。また同じ事態に陥っても頼ることはできない」

「それでも同じ戦術を使われますか？」

「そうしなければ勝てないのであれば、迷うことはない。それまでに少しでも皆が強くなっているよう願うばかりだが、しばらくはきつい地形もないだろう」

「この先、解放軍に犠牲者が出ても躊躇うことはないのですか？」

「そんなものは帝国を倒すまで放っておくがいい。とうに何十人も殺してきた私だ。解放軍にだろうと帝国軍にだろうと犠牲者が出るのに狼狽えたこと自体、間違いだったのだ。全ての咎は私一人が負う。そのためのリーダーだからな」

「承知しました。数々の無礼をお許しください」

「あなたに謝られる覚えはない」

ウオーレンが差し出した手をグラント・ディーナは握り返した。

「昨晚、話したとおり、ディアスポラには少人数で攻め込もうと思う。あなたは休んでいるといい」

「申し訳ありません」

その後、グランディーナと入れ違いにマチルダが朝食を持ってきてくれたがウォーレンは断った。彼女も土気色の顔を見て強く勧めることはせず、菓草茶の約束をして立ち去った。

休もうとしたがなかなか寝つかれず、老占星術師の脳裏にはさまざまな考えが飛来しては去っていった。

後にウォーレンとムーンは思い返す。

解放軍のリーダーの危険性に気づいたのはまさにこの時、ディアスポラ大監獄陥落当日であったことを。

グランディーナがアイーシャのせひにと取り分けておいた朝食を食べ始めたころ、ランスロットがヨハンたちの到着を告げた。

「皆を集めろ。休んでいる者にも声をかけろ」

「承知した」

両軍が揃うあいだにグランディーナは朝食を平らげ、アイーシャをしばし唾然とさせた。

リーダーの早食いにもはや慣れつこになったカリナとストレイカーは旗を掲げて平然とした顔だ。彼に加えてデューンのお仲間であるホークマンのチェンバレンとヒールシャーも旗手を命じられている。ただ彼が

実はカノープスより年上だと知り、いまいち話が合わないのは残念だが、それも一緒に戦っていくうちに慣れるだろう。「何とかなるさ」は人間より長命のホークマンには共通の処世術だ。

この旗を見ると、初めてこれが解放軍の旗だと言われた時の戦士たちのはしゃいだ顔を思い出して、カリナはしみりした心境になる。あの後でアルベルトとブラッドフォードがヤドリギの葉をくれた。昔、ヴェリーとセキと交換しあったお守りだそうだ。別れ際にもまた泣きべそをかい、かしまし娘三人組に叱咤されていたが、いまごろどうしているのだろう。

するとチェンバレンに脇をこづかれた。いつのまにやらぼんやりして、旗を降ろしていたらしい。

やがてやってきた旧ホーライ王国勢は総数五〇名、有翼人や魔獣はおらず、人間ばかりである。そのうちの何人かはヨハンのような非戦闘員だった。

対する現解放軍は四七人と二頭の魔獣やらドラゴンだ。なかでも四頭のドラゴンは威圧感があり、度肝を抜くには十分だった。旧五王国のなかで魔獣で軍団を形成したのはゼノビアのみなのでヨハンたちには馴染みがなかったようだ。

「私が解放軍のリーダー、グランディーナだ。皆を

代表してあなた方を歓迎する。ただ、あなた方も承知のことと思うが、ディアスポラ大監獄の解放が大詰めを迎えていて、今日にも陥落させるつもりだ。あなた方の歓迎はそちらが片づいてからということにさせてもらう。

アッシュ、ウオーレン、ギルバルド、前に出てくれ」
呼ばれた三人が進み出ると旧ホーライ側から驚きの声が漏れた。

アッシュは主君暗殺の汚名を着せられた元ゼノビア王国騎士団長、ギルバルドは一度はゼテギネア帝国の軍門に降った元ゼノビア王国魔獣軍団長、二人とも曰くつきであることは解放軍のなかでも指折りである。だから、そういう反応をされることにも慣れていたので何処吹く風といった顔をしている。

「この三人には騎士、魔法使い、魔獣部隊の取りまとめを任せている。あなた方も彼らの下に就くことになるが、そういう部隊編制を含めた話もディアスポラを落とした後、次のマラノ攻めの前に行うつもりだ。ヨハン、あなた方の名簿を後でくれ。あなたたちは解散して、ここに残った者の指示に従え」

「承知した。それでは一つ、お願いしたいことがあるのだがよろしいか？」

「何だ？」

ヨハンの顔つきが急に厳しくなり、ホーライ人たちが足を止めた。解放軍側も当然、聞き耳を立てている。

「副監獄長のシャルル、エイゼンシュタインという男を命があるまま捕縛していただきたい」

「監獄長のノルン、デアマートではなく、副監獄長をか？ 理由は何だ？」

「この男は前の監獄長であり、二年前にディアスポラにやってきた。囚人の死亡率がエイゼンシュタインになつてから倍増したと言つてもいいだろう。奴には戦死ではなく、公開処刑こそ相応しい。それを我々の手で行いたい」

「穏やかな話ではないな。私が断ると言ったら、どうする？」

「理由を聞かせてくれ」

「私にエイゼンシュタインを裁く権利はないからだ。同じようにあなたにもない。あなたに私怨があるというのなら話は別だが、そいつがどれほどの悪人だろうと裁く権利は私たちにはない」

「馬鹿な！ あなたたちは奴のためにどれほどの人が無念のうちに亡くなったか知らないから、そんなことが言えるんだ」

「何人、死んでいようと同じことだ。公開処刑など意味はない。あなた方の存在感を認められたいという自己満足だ。まあ、聞け。そいつを野に放し、民衆の裁きに任せると言うのなら、同意しなくもないが？」

「それでは私刑だ。そんなことが可能なのに、なぜ公開処刑では駄目なんだ？ わたしたちの自己満足にすぎないからか？」

「公開処刑ではそいつを殉教者にする。ディアスポラ大監獄などゼテギネア帝国のなかでは一つの機構にすぎない。その前監獄長もそれほどの地位にはあるまい。そいつを公開処刑したところで所詮は下っ端だ、私たちが得られるものなど何もない。だが民衆にそいつを任せれば、裁きは自ずと下されるだろう」

ヨハンだけでなく、話を聞いていた者は思わず息を呑んだ。

「生き延びるも殺されるも己がしたことへの報いだ。その方がよほど公正だと思わないか？」

「わかった。あなたの言うようにしよう。だがその方が怖いな」

「怖くなければ意味がない」

それから、ランスロットがホーライ人の一人に歩み寄った。昨日会った騎士で、相手も彼のことは覚えて

いたようだ。えらく恰幅のいい男だ。

「わたしはランスロットⅡハミルトンです。これからよろしく」

「わたしはケビンⅡワールドだ。昨日はあなたが騎士の取りまとめだと思っていたのだが、そうではないのだな」

「アッシュを差し置いてそのような地位に就く気はありませんよ」

「ランスロット、行けるのか？」

「ああ、待ってくれ。」

「また後で話しましょう」

彼がグランディーナのもとに戻ると、ウォーレンと行き違いになった。いまままでつき合っているだけで精一杯だったのだろう。マチルダが付き添っていた。

「わしも残らせてもらいたい。そなたたちの足手まといになりたくはないのでな」

「それならば、あなたに残った者をまとめてもらいたい。今日一日、ここで休んで、明日、ディアスポラに来てほしい。我々はディアスポラであなたたちを待っている」

「承知した」

アッシュは頷き、その場を離れる。残ったのは魔獣

部隊の面々とアレックフロレンス、ロベールクリスタロス、カシムガデム、ウイングスリースタリー、ポリーシャプレージ、ヴァネッサマツケイ、かしまし三人娘、アンジェエルカシユにデネブだ。「元気なのはあなた方か。ディアスポラ攻めは肉弾戦中心になりそうだな」

「これでも予想以上なんだろう？ あれがなければ、俺だつて寝ていたかもしれないからな」

「あーら、カノープス、そんなこと言っちゃつて。あたしの特製スープのおかげだつて素直に認めなさいよ。あたしがいなかったら、いまごろ解放軍は病人ばかりだったのよ」

「だがデネブ、あなたは昨日、ラロシエルに行きたいと言つてなかったか？」

「ええ。でも一人で行くわ」

「今日でなければ駄目なのか？」

「そうよ。今日は特別な市が立つ日なのよ。そこで買い物してこようと思つてるの。だからカボちゃんたちも連れていかないでね。あの子たちのためのお買い物なんだから」

「何だ、それ？ だいたい特別な市が立つ日だなんて、どうしてそんなこと知ってるんだよ？」

しかし、デネブはカノープスの言葉を無視して、ソミュールの方に歩いていつてしまった。どこからともなく現れた四体のパンプキンヘッドが後に従う。その姿にホーライ人たちは驚いた様子だったが、三人娘も小さな声をあげた。

「パンプキンヘッドの改良でもするんだろう。昨日も命中率は良くなかったからな」

「良くない、だと？ 五回に一回しか当たらないのが良くないなんて言えるか？」

「昨日は四回に一回だったかな」

しかし、誰もそれ以上、文句は言わなかった。正直なところパンプキンヘッドの攻撃など期待していなかったからである。だが昨晩のデネブの功績を考えれば、パンプキンヘッドの改良だろうが許可してもいいという寛大な気持ちであった。

「それでどう行くんだ？」

「こつちで話そう。」

その前にライアン、ドラゴンは連れていけない。あなたはこちらの護衛に残ってくれ。

それとアンジェ、今回はあなたの道案内も不要だ。弓矢で活躍してもらおう」

「空から行くのか？」

「そのつもりだ」

「しようがねえ。これで空を飛べるドラゴンがいれば無敵なんだが、ゼテギネアにはいねえからな」

「どんなドラゴンにも蝙蝠こもりのような翼があるが、それらはどれもお飾りにすぎず、空を飛ぶにはまるで大きさが足りない。」

「勘弁してくれ。機動力のあるドラゴンなんて考えるだけでぞつとする。何だって万能つてわけにはいかないだろう？」

「そいつは違いねえ」

カノープスとライアンはそれでひとしきり笑いあつたが、アンジェはさも残念そうな顔だった。

彼女はデューンの仲間の女戦士だが、地元の猟師の娘で誰よりも地理に詳しく、ここまで解放軍の案内で大活躍したのである。アンジェがいなければディアスポラの山と森は解放軍にも不案内だったはずで、そういう意味では今回の最大の功労者でもあった。

「何か、あたしには弓を引いてるよりも、こつちの性が合ってるみたいですよ。また同じような仕事をさせてもらえませんか？」

「あなたが希望するのなら考えておく。だが私は人使いが荒いぞ」

「あたしも体力には自信がありますよ」

「それは私も知っている。どちらにしても続きは戻つてきてから話そう。」

こつちだ」

「女の影なんて聞いたことねえな」

「逆に意表をつけて誰も影だと思わないんじゃないかな。彼女は土地勘もいいし、度胸もある。案外、向いてるかもしれない」

「まあ、俺もそいつは否定しねえけど」

「お二人ともいいこと言ってくれますねえ」

グランディーナの先導で一行は野営地を離れ、川沿いに向かった。そこではライナスⅡクウェンティンとトリムⅡランザムが待機していた。

「待たせたな。ディアスポラ大監獄の状況を説明してくれ」

トリムが地面に大監獄の見取り図を描き始め、ライナスはそれを指し示しながら話し出した。

「大監獄は外壁に囲まれ、入り口は一ヶ所しかありません。建物は二つあり、大きな方が監獄、小さい方が宿舎となっています。帝国軍はほとんどが宿舎にいますが、ほかの町から逃げてきた兵士も若干混じっているようです。ですが、大監獄そのものがもともと防

衛用の建物ではありませんので、宿舎に常時いる兵士は少なく、外壁の守りに重点が置かれていました」

「敵将はノルンIIデアマートか？」

「そうです。ただ、兵士のなかには副監獄長のエイゼンシュタインに従う者もいて、指揮系統は乱れているようです。何でも半月前からノルンが口を出すようになって、それまではお飾りの監獄長だっただけにエイゼンシュタインも含めて反発する者も多いようなんです。そもそも我々が来るまでノルンは解放軍に投降するだろうと考えていた者が帝国軍も含めてですが、ほとんどでしたから」

「半月前？」

「我々がゼノビアを取り戻した前後だな」

「そうだ。」

「フィーナ、モームを呼んでこい。そこらへんの事情を知っているかもしれない」

「了解！」

彼女は元氣よく走っていった。

「駐留軍の構成は？」

「ほかの町とそれほど違いません。ただ、兵士がいくらか増えているぐらいで」

「それならば、大監獄を空から奇襲する。」

カシム、ウイングス、ポリーシャ、ヴァネッサ、シルキイ、マンジエラ、フィーナ、アンジェは先制攻撃、残りで門の守備隊をたたく」

そこへフィーナIIタビーがモームIIエセスを連れて戻ってきた。

「何でしょうか？」

「ノルンIIデアマートについて、あなたの知っていることを教えてくれ」

「私も直接ノルンさまから伺ったことがあるわけじゃありませんから、そんなに詳しくないんですけど、ノルンさま、名家のお嬢様なんですよ。旧ハイランド王国でもウインザルフ家並に古い名家で、法皇になったのもお家柄のせいだっというのは有名でしたね。でも、ウインザルフ家は御当主のヒカシューさまが大将軍にまでなられて名実ともに王家に匹敵するほどのお家柄になったんですけど、デアマート家はその逆でノルンさまのお父様の代で身代食いつぶしちゃったんですって。深窓の御令嬢がうちを出るなんて、よつぼどなことですもんね」

「ノルン個人のことはよくわかるが、大して役に立つ話じゃないな」

「そうですか？ どんな話ならお気に召しますか？」

邪意はないのだろうか、とぼけた顔で意外と鋭い突っ込みを入れるのがモームの怖いところだ。それに、グランディーナが女性陣の言い分に甘めであることもカノープスは気づいていた。

「それならば、ほとんどの人間に解放軍に加わるだろうと思われていたノルンが半月前から急に解放軍討伐に熱心になった。半月前と言えば我々がゼノビアを落としたころだ。心当たりがあつたら教えてくれ」

「ゼノビアねえ。帝国教会の高位の司祭にゼノビア人がいるという話も聞いてませんし」

とモームはしばし考え込んだが、そのうちに手をたたいた。時々子どもっぽい仕草をするのも彼女の癖である。

「そう言えば、ゼノビアってデボネア将軍がいますんでしたっけ？ 確かエンドラさまの悪口言つて左遷されたとかつて聞きましたけど、ノルンさまってデボネア将軍の恋人なんですよ、ご存じでした？ あ！まさかと思えますけど、デボネア将軍を殺しちゃったりしてないですよね？」

「奴には逃げられた」

「ええーっ?!」

「そんなに大げさに驚くことか」

「だって、四天王にまでなった人が逃げるなんて思いませんもん。ええー、格好良かったのになあ、逃げような人だなんて思わなかったなあ」

「恋人が逃げたから我々を討つのか？」

「それは、わかりません」

ライナスとしてはそう答えるほかない。いや、グランディーナの言葉は特に誰かに向けられたわけではなかったのだ。だが、彼はそれまでの成り行きでつい答えてしまっただけだった。もつとも、それがランスロットでもギルバルドでもカノープスでも、似たような答えになっただろう、ということはその場にいる誰にも容易に察しがついた。

「ノルンはデボネアが逃げたことを知っていると思うか？」

「それもわかりません」

「旧ホーライ王国の連中は知っていた。帝国が知つていても、おかしくあるまい？」

「知つてたところで、そういうのは逆に知られたくないもんだらう？ 少なくとも俺なら部下には言えねえけどな」

「そうだな。わたしも賛成だ」

「でも、ノルンさまって世間知らずなところのある

方だったから、ご存じないかもしれませんがよ」

またモームが口を挟む。

「お家があんなふうになかなかれば、一生、うちのなかのことしか知らなくても不思議はないような方でしたもん。そういう世間ずれしてないところが可愛らしい方だったんですよ。それなのに全然、高飛車じゃなくって。それにデボネア將軍と並んでると美男美女で、それだけで目の保養になりますもんね。あんまり公共の場でご一緒してるのをお見かけたことはなかったですけど」

「わかりますう！」

シルキィ||ギンターが黄色い声をあげたが、マンジェラ||エンツォは反対し、フィーナが同意した。たちまち、かしまし娘が四人に増えたが、グランディーナはこの会話に強引に割り込んだ。彼女らの美点をあげるならば、人の話は素直に聞く、というところだろう。もちろん聞かせるだけの強さも必要だが。

「モーム、あなたはノルンと個人的な面識があるのだったな？」

「ええ、何回かお世話してさしあげたことがありますよ。でも、私なんかその他大勢で覚えておいでじゃないかもしれませんけど」

「あなたもディアスポラ攻めに同行しろ。ノルンを説得できればよし、できなければ言うまでもない」

「ノルンさまを斬るつてことですか?! デボネア將軍も逃がしたんだからノルンさまだつて逃がしてくればいいじゃないですか」

「勝手に逃げた奴のことをこちらが逃がしてやったような言い方をするな。それまでの立場はどうであれ、いまのノルンはディアスポラの監獄長であり、我々の敵だ。彼女が出した剣を引つ込められないと言うのなら、ただ捨て置くわけにはいかない。行くぞ！」

一同は計九頭のグリフォン、コカトリス、ワイバーンに分乗して野営地を発つた。眼下に広がるのは人の手が入っていない山と森だ。

「やだ、街道が見えなくなっちゃった」

同乗したシルキィが心細そうな声をあげる。そのせいか、グリフォンに初めて乗るという不安もどこかへすつ飛んでしまったらしい。だが彼女の言うとおりだ。ランスロットも内心驚いた。森の中ではソミュールの町も孤立しているように見えてしまう。

「案ずるな、帝国が町と街道を支配していると言っても山と森に比べればずっと狭い地域、所詮は点と線にすぎない」

ルテキアの港でグランディーナはそう言った。だが実際に帝国と戦っていて、そのことを実感した者は少ないだろう。確かにディアスポラの山と森は広大だったが、彼らもまた呑み込まれそうに思ったのだから。

北西に向かううちにソミユールは見えなくなった。山を越え、森を越える。川が多いのもディアスポラの特徴だ。それらは街道とは違って、上空から見ても青くて細長い紐のようだ。

こうしてディアスポラを俯瞰することができるのも空を飛んでいるおかげである。しかし皆に「点と線」と言ったグランディーナは最初からディアスポラ全体を視野に収めていた。

やがて眼下にディアスポラ大監獄の敷地全体が見えてきた。大監獄とはよくぞつけたものだ。その敷地はソミユールなどよりよほど大きく広く、町としての規模はディアスポラとも見えた。町と違うのは建物が特別大きいのが一棟、小さいのが一棟あり、大きい方の建物は一部で弧を描いた左右対称形であるかと思えば、一部では八方に放射してもおり、複雑な形をなしている。それでも全体がひとつながりであるのが監獄らしいと言えようか。

先頭に行くエレボスが大監獄に向かって降下を始め、

ランスロットの操るシューメーも続く。

敵の弓が届く前に、先制の雷が四連発炸裂した。魔術師に比べると魔法使いの唱える呪文は範囲が狭い。魔法使い二人よりも魔術師一人の方が強いのだ。だからウォーレンもグレッグIIシェイクもないのは戦力的にかなり落ちてしまうのである。

続けて弓も放たれた。だが飛んでるグリフォンからは命中率がすこぶる悪く、威嚇程度だ。

もちろん帝国兵もただ攻撃を受けるに甘んじてはいない。いきなりの本拠地襲撃に慌てていたのも弓矢まですでにグランディーナたちが着陸するころには一人の剣士の命令で防御、さらには反撃の体勢を整えつつあった。実質的な指揮権はノルンではなく、その剣士にあるようだ。

それらを見下ろしているのが監獄長のノルンだ。しかし元法皇で、没落したとはいえ名門貴族のお嬢様が看守と話の合うはずもない。彼女は帝国軍のなかでは孤立しているのかもしれない。

「反乱軍が何の用だ?! ここが神聖ゼテギネア帝国管轄下のディアスポラ大監獄と知っての所業か?」

しかしエレボスから降りたグランディーナは堂々とした態度で曲刀を抜き放った。その姿に帝国兵のあい

だから囁き声が漏れる。解放軍リーダーの手配書はディアスポラの町中のいたるところに貼られている。その金額は二万ゴートだったが上がっていく日もそう遠くはあるまい。ほかに名があがっていたのはギルバルドだけであるが、こちらもいずれ増えてはいくのだろう。

「こちらの動きにさんざん翻弄されていて言いたいことはそれだけか。我々はディアスポラ大監獄の解放に来た。帝国の管轄下にあることも百も承知の上だ。それ以外の用でなど来るものか。だが一つだけ訊いておこう。シャルルⅡエイゼンシュタイン副監獄長というのはあなたのことか？」

「だつたらどうした？」

「その首、もらい受ける！」

「させるか！」

刀と刀がぶつかり合い、火花が散った。素早い踏み込みで一瞬にして間合いを詰めたグランディーナはそのまま斬りかかっていく。その動きに容赦がない。

たちまちエイゼンシュタインは防戦一方になり、その顔は青ざめたが、グランディーナの表情は変わらないう。そのさまは時として獲物を追いつめる狩人の眼差しにも似ている。

それをきつかけに解放軍と帝国軍のあいだに再び戦端が開かれた。

いままであまり戦闘では目立たなかったギルバルドたちだったが、魔獣を使つての戦闘はやはり上手い。魔獣使いと組んだ魔獣は二倍三倍の強さを発揮する。

その強さは一対一で戦えば、とうてい人間がかなうものではないが、逆に言えば、魔獣使いのいない魔獣は本来の力をほとんど発揮できないし、魔獣使い自身の戦闘力も大したものではない。それは数の多少の不利を補つてあまりある戦力だった。帝国軍にはそのことがそもそも誤算であった。だがそれ以上の誤算は解放軍リーダーの強さだったかもしれない。

対デボネア戦を見ていたランスロットには逆にその時よりも手心を加えているように見えたのだが、剣を合わせるエイゼンシュタインにはとてもそんな余裕はなかつたろう。

将が弱気になれば戦線に影響しやすいのが局地戦の怖いところだ。グランディーナはそのことをよく承知しているし相手のそういう態度は見逃さない。ましてや弱気になったところは味方にさえ見せないのは、弱気になった味方の方が敵よりよほど手強いことを知っているからだろう。

帝国軍が弱気になった隙を、当然ランスロットは見逃さなかった。アレック、ロベールとともに宿舎に突入し、散発的な抵抗を退けると、いちばん奥で何もできずに事態を見ているだけだった監獄長ノルンを捕らえた。

「失礼しますよ！」

「無礼者！ 私に触らないで！ それ以上、近づいたら舌をかみますよ！」

だが彼女は助けを呼ばない。血の気の引いた顔をし、下がるだけ後ずさりをしただけだ。さすがに三人ともそう言われては手出しができない。

「ノルンさま！」

そこへモームが駆け込んできた。彼女はノルンの前まで進むと臣下のように片膝をついた。

「あなたは誰ですか？」

「私はモームⅡエセスといえます。昨年、ノルンさまのお世話を言いつかりました帝国教会の司祭です。もうお忘れかもしれませんが」

「いいえ、思い出したわ。あなた、お茶の点て方がとても上手だったわ、お話もおもしろかった。そうでしたよ、モーム？」

「ありがとうございます。お茶は、母直伝で」

「アレック、君だけここに残ってくれ。わたしとロベールは下の加勢に行ってくる」

「わかりました」

「それで、あなたがなぜ反乱軍と一緒にいるの？」

まさか、捕虜になっちゃったの？

「違います、ノルンさま！ 私は反乱軍、じゃなくて、いまは解放軍にいるんです。アヴァロン島で加わることになって」

「何てこと！ 反乱軍は私のクアスを殺したのよ、なぜあなたのような聡明な女性が反乱軍に加わらなければならぬの?! まさか、脅されて？ それならば、私が身代わりになります。」

「ねえ、あなた、アレックとか言ったわね？ モームの代わりに私が捕虜になるわ、リーダーの方にそう交渉してくださらない？」

しかし、アレックが返事するより早く、外で悲鳴と歓声が上がリ、三人とも窓際に駆け寄った。

エイゼンシュタインが跪き、刀はどこかに飛んでいた。その前に立つグランディーナが刀を鞘に収める。

こちらの視線に気づいたのか、顔を上げるとノルンと目が合った。

「モーム、話は終わったのか？」

「いえ、それが全然」

「反乱軍のリーダーというのはあなたでしよう？」

「違う。我々は解放軍だ。反乱軍というのは帝国が勝手につけた通称だ、撤回してもらおう」

「どちらでもいいことだわ。リーダーはあなたなの、そうじゃないの？」

「私は解放軍のリーダーだ」

「そう。ならば、お願いがあるの。どんな事情があるのか知らないけれど、モームを本国に帰してあげてくださいませんか？ あなたたちの捕虜には私になります。大した価値はないでしょうけれど」

「モームは捕虜じゃないから、その話は成立しない。それよりもデボネアの件はどうするんだ？ あなたが我々の打倒に廻ったのはデボネアが逃げたからだと思っていたが違うのか？」

「え？ 嘘よ！ クアスは、デボネアはあなたたちに倒された」と

ノルンの視線がエイゼンシュタインに向けられた。

「あなた、確かにそう言ったわね？ デボネア将軍が反乱軍に倒されたと言ったわよね？」

しかし副監獄長は苦虫を噛み潰したような顔でそっぽを向いた。

「エイゼンシュタイン！ 命令です、ゼノビア守備隊長デボネア将軍は反乱軍と戦ってどうしたのですか？ お答えなさい！」

「逃げたと言っている」

「あなたには聞いていません！」

エイゼンシュタイン、あなたは確かに言ったわね？ゼノビア守備隊長デボネア将軍は、反乱軍と戦い、無惨に敗れたと？ 最後まで雄々しく戦い、殺されたと？ 違っていたというのですか？ なぜそのような嘘をついたのです？」

副監獄長はそっぽを向いたとき頑なに沈黙を守った。

「ノルンさま、それで私が来たんです」

モームがこわごわと声をかけたが、ノルンは窓枠を震える手で掴んでいるきり、動かない。それでモームは思いきって言葉を継いだ。彼女は大監獄に来るまでギルバルドと同乗したのでデボネア将軍逃亡の詳細を聞いておいたのだ。公平という意味ではまことに確かな人選であった。

「デボネア将軍は解放軍に負けた後、逃げました。」

エンドラさまにもう一度お会いして、その真意を確かめると仰つて。ノルンさま、デボネア将軍は殺されてなんかいません」

「それは、本当なの？」
ノルンはいくまでもエイゼンシュタインの答えにこだわった。

副監獄長はこの期に及んでやっと渋々頷く。

「クアスが、あの人が生きてる！ 良かった、クアス！ もう一度あなたに会えるのね！」

人目もはばからずにノルンが泣き出し、エイゼンシュタインは忌々しそうに舌打ちをする。モームは元法皇の手にそつと自分の手を重ねた。その手をノルンは拒まない。

アレックはそんな二人をおいて、皆に合流した。

グランディーナの指示で大監獄に閉じ込められていた人びとが解放されていった。だが、囚人たちの大半はすでに亡くなっており、その身元もわからぬ者も少なくない。大監獄にはまともな墓地さえない。ここで亡くなった囚人たちはまるでゴミ捨て場のような墓穴にまとめて放り込まれるだけなのだ。それもゼテギネア帝国の管轄下になってからの顕著な変更点であった。大方の予想を裏切つて、グランディーナは解放軍に帝国軍まで加えて、大監獄の解放に務めた。次の目標に掲げたマラノまではカストロ峡谷を経由して十日も

かかる距離だ。ゼノビアの次に掲げたマラノ解放を遅らせてまで彼女が大監獄の解放にこだわる理由のわかる者はいないが、あえて反対する者もいなかった。

だが、翌炎竜の月五日、アッシュに率いられた解放軍の残りがやってくる。埋葬は順調に進み、翌日にはカストロ峡谷に向けて発てることになったのであった。そのなかで、解放軍は予想もしなかった人物を助け出した。

「わたしはバルカス・ボイドといいます。ここであなた方にお会いしたのも何かの縁でしょう。実は解放軍の皆さんにお願いしたいことがあります」

その名に驚いた者は少なくなかった。バルカスと言えば、旧ドヌーブ王国が誇る偉人の一人で天才彫刻家の名をほしきままにした人物である。優雅にして気品あるその作風はゼテギネア大陸全土で受け入れられたのだが、バルカス自身は十年ほど前に死んだものと思われていたからだ。

もつともいちばん驚いたのは誰であろう元監獄長ノルンであった。彼女は本腰を入れて反乱軍、すなわち解放軍打倒に気持ちを変えざるまでは大監獄の業務など、そつちのけで過ごしてきたからだ。

「バルカスさま、あなたのお手になる象牙の貴婦人

という像をザナドユのウインザルフ家で拝見したことがございますわ。私としたことが何という怠慢でしょう。あなたさまがここに囚われておいでだったことも存じ上げなかつたなんて」

「いいや、お気になさいませぬ。こうして解放軍が来るまで生きながらえることができたのですから」

そうは言うものの、バルカスはかなり弱っていて、解放がもう少し遅ければ存命はかなわなかつただろう。

「それであなたの頼み事というのは何だろうか？」

「あなた方は旧ドヌーブ王国の英雄サラディンⅡカーム殿をご存じでしょうか？」

一呼吸置いてからグランディーナは頷いた。

「知っている」

「あの方は十年前に兄弟子のアルビレオに倒されたことになっていますが、実はただ石化されただけで生きておいでなのです。もしも石化を解除することができれば、あなた方にとってこの上なく強力な味方となりましょう。旧ドヌーブのためばかりでなく、どうかサラディン殿をお助けください。わたしはサラディン殿が石化されたことを知り、バルモアの各地にサラディン殿の姿を模した像をたくさん造りました。あの方がわたしたち旧ドヌーブ王国の者に残してください」

たものを忘れた者はおられません。ですがゼテギネア帝国はサラディン殿の像を全て破壊しようとしてました。わたしの像もその意図も帝国の意にはそぐわぬものでした。わたしは反逆罪を問われ、このディアスポラに送られることになったのです」

「サラディン殿が生きておいでとは心強いことだ。

幸い、カストロ峡谷からバルモアはすぐ、マラノへ行く前にサラディン殿を救われるのだろうか？」

ヨハンがしゃぐように言ったが、皆の気持ちも似たようなものだ。

サラディンⅡカームの名は風変わりなその経歴とともに知る者が少なくない。

彼は賢者ラシュディの二番弟子でありながら、旧ハイルランド王国の女帝エンドラとともに戦争を起こし、ゼテギネア帝国を興した師と兄弟子に反逆し、生まれ故郷の旧ドヌーブ王国の首都バルモアで反帝国活動を行っていたのだ。その行動はほかの三王国の抵抗よりも長く続いたが、ゼテギネア暦十四年、サラディンが兄弟子アルビレオに倒されたことで止んでしまったのである。同じ時にバルモアも壊滅的な打撃を受け、バルモア遺跡と揶揄されるほどだ。

しかしグランディーナは静かに首を振って答えた。

「予定どおり先にマラノへ向かう。バルカスの話を聞いていなかったのか。サラデインは石化されている。それを解除する手段がなければバルモアへ行ってもサラデインは助けられない。だが解除する方法が見つければバルモアへは行くつもりだ」

「それは一理あるな。地理的な影響で言えば、マラノに匹敵するような場所はほかにあるまい」

アッシュが同意し、ウォーレンも頷いた。二人にそう言われるとあえて反対する者はいない。カストロ峡谷からバルモアへ向かうという話はたちまち立ち消え、皆の気持ちはゼテギネア大陸最大の都市、マラノへ向けられた。

もちろんバルカスは残念そうな顔をしていたが、反対はしなかった。彼もサラデインの石化を解除する手段は知らないものに見える。知っていれば、あるいは生き延びられなかったかもしれない。

解放軍がディアスポラを発つたのは炎竜の月六日のこと、開放された大監獄に一人の囚人もなく、副監獄長エイゼンシュタインも追放された。

そして、元監獄長ノルンは、ちゃっかり解放軍に加わっていた。

「あなたたちはいつか帝都へ向かうのでしょうか？クアスにはきつとそこで再会できるわ。もしも帝国軍に戻っていた時は私が説得します。それでかまわないでしょう？」

「あなたは帝国教会の最高位ではなかったのか？」

「あら、そんな地位に未練はないわ。どうせ私などお飾りにすぎないんですもの。それにいまの私はディアスポラの監獄長、空手で帰ったらどんなお咎めを受けるかしれません。そんなのは嫌だわ」

「その様子ではデボネアが来いと言えば、簡単に私たちを裏切りそうだな」

「クアスがそう言えば、私は彼の行くところに行きます。それだけのことよ」

あつけらかんと言いつつ放つたノルンにモームも弁護できないようだ。だがグランディーナはノルンの弁を咎めなかった。代わりにこう言つて二人を慌てさせただけだ。

「あなたたちが敵に廻るのなら、その時は覚悟しておくといい」

さすがのノルンも、クアスIIデボネア將軍を解放軍に加わるべく説得する論を、本気で考え始めたようであった。

ディアスポラでほぼ倍に増えた解放軍だったが、カストロ峡谷へ移動するまでのあいだに部隊の割り振りは済んでいた。

ヨハンやケビンも含めてグランディーナが毎日一人ひとりと話し合い、それにはウォーレンとランスロットが必ず、時々アッシュやギルバルド、カノープスもつき合っていたことであつた。

ポロップ川の流れが長い年月をかけて作り出したカストロ峡谷は、全長一五〇〇バーム（一バームは長さの単位、約一キロメートル）、幅七五バーム、最深一・八バームという、ゼテギネア大陸全土で見てもほかに類のない大峡谷である。

地理的に旧ホーライ王国と旧ドヌーブ王国の国境、さらに北に行けばガリシア大陸にも接するカストロ峡谷は、ゼテギネア帝国の代になつてからは顧みられることのない辺境の一つであつた。

解放軍も当然ここは素通りし、さらに四日かけてマラノの都へ向かうはずだったのだが、予定外の足止めを喰らう。

ある者はそれを運命と呼び、ある者はそれを偶然と

呼ぶ。

だが、そこに人の意志が働いていないことはない。歴史を作り出すのは有名無名を問わぬ人である。

かくて彼女らはここに出逢う。ゼテギネア帝国を倒すという意志の下に。

Stage Six

ディアスポラの大監獄



